

令和6年度 大学教育再生戦略推進費
高度医療人材養成拠点形成事業
(高度な臨床・研究能力を有する医師養成促進支援)
申請書

代表校名	国立大学法人東京大学		
連携校名	なし		
事業名	高度がん医療に対応する人材養成と基盤強化		
申請タイプ		【タイプA】臨床・基礎融合研究基盤人材養成拠点	
※タイプA、タイプBのいずれかを選択 ※タイプBの場合は本事業で主に対象とする診療領域を記入	○	【タイプB】特色臨床研究基盤人材養成拠点	
		主に対象とする診療領域（複数可）	がん領域
事業協力機関 (連携校を除く)	自治医科大学附属病院、獨協医科大学病院、国立国際医療研究センター病院、虎の門病院、NTT東日本関東病院、日本大学医学部附属板橋病院、帝京大学医学部附属病院、日本赤十字社医療センター、東京都立墨東病院、山梨大学医学部附属病院、自治医科大学附属さいたま医療センター、コニカミノルタREALM、テンクー、計13機関。		

事業の構想等

＜事業の概要＞

がんゲノム医療をはじめ高度がん医療・研究分野において人材不足が顕在化しており、学生教育を含め、この分野をけん引する人材育成が急務である。本事業では、高度がん医療・研究において先導的な役割を果たしてきた東京大学がその**基盤を最大限に活用した人材養成プログラムを実施し、さらにヒト検体利活用など研究支援体制面でのアンメットニーズの強化に同時に取り組み、両者を有機的に連動させる**ことで、世界トップレベルのがん診療の実践とがん研究を推進するための基盤を構築する。先駆的取り組みとして、がんゲノム医療における医学生教育を重点的に実施し、特に**がんゲノム医療の現場における診療参加型臨床実習の充実による高度な臨床能力、研究マインドを有する医師を養成する。橋渡し研究・アカデミア創薬分野をはじめ新たな大学院教育にも取り組む。**本事業により養成した人材を全国に輩出することで我が国のがん診療・研究の強化に貢献する。

＜臨床研究等に関する実績＞

本学ではがん研究領域において、**臨床・基礎共に国際的にトップレベルの実績があり、臨床研究中核病院である医学部附属病院と共にこの分野をけん引してきた。本事業で重点的に取り組むがんゲノム分野における強みは本学の特色**であり、大規模がんゲノム解析研究や様々ながん関連の臨床研究で多くのインパクトの高い成果を挙げている。本学では**高性能がん遺伝子パネルであるToday OncoPanelを独自に研究開発し、臨床研究（2017年－）や先進医療（2018-2020年）における性能評価、患者還元の実践を経て、2023年8月より改良版のGenMineTOPが保険適応**となっている。このパネル検査を用いた小児固形腫瘍を対象とした前向き臨床研究（JCCG-TOP2）が進行中で、造血器腫瘍遺伝子パネル検査開発にも貢献している。2019年からスタートした保険診療下の包括的がん遺伝子プロファイリング検査においては**がんゲノム医療中核拠点病院の指定を受け、我が国のこの分野をリードしてきた。各分野トップレベルの専門家集団によるエキスパートパネルを実践し（申請時で計3,310件、2023年年度実績975件）、**教育の場としても位置付けつつ関連する多数の研究や成果発表を行い（厚生労働科学研究費による全国規模の患者・施設実態調査研究、政策提言、市民公開講座、リアルワールドデータを用いた研究論文等）、この分野の診療・教育・研究面で極めて高い実績を有している。

※過去3年間で公開した医学分野の学術機関リポジトリの登録数を以下に記入してください。

（令和5年度について集計が完了していない場合、令和2～4年度の欄に数値を入力し、令和5年度の欄は「－」を入力ください。）

学術機関リポジトリデータベース：<https://irdb.nii.ac.jp/>

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	計
基礎医学	—	—	—	—	—
臨床医学	—	—	—	—	—
計	1	215	435	239	890

※臨床研究を支援する組織が既にある場合は以下に記入してください（令和5年5月1日時点）。

組織名称		臨床研究推進センター、トランスレーショナルリサーチセンター、臨床研究ガバナンス部
専任職員	人数	75人
	職種	臨床研究推進センター長1人・副センター長1人、TRセンター副センター長1人、臨床研究ガバナンス副部長1人、開発企画2人、プロジェクトマネジメント6人、CRC14人、データマネジメント4人、モニタリング2人、監査2人、生物統計3人、薬事1人、安全性情報2人、倫理1人、一般事務2人、その他（薬剤師、看護師、臨床検査技師、心理士、他）32人
兼任職員	人数	21人
	職種	TRセンター長1人、臨床研究ガバナンス部長1人、開発企画4人、プロジェクトマネジメント1人、薬事1人、安全性情報1人、広報1人、一般事務3人、その他（薬剤師、看護師、臨床検査技師、心理士、他）8人
支援件数 （令和4年度実績）		CRCIによる臨床試験実施支援39件、医師主導治験などの臨床試験実施支援26件、生物統計家による臨床試験支援24件、倫理審査申請支援65件

※組織以外で臨床研究を支援するための取組がある場合は以下に記入してください（令和5年5月1日時点）。

医学部附属病院においては、当院所属の研究者が臨床研究を安定的かつ継続的に実施できる環境を提供する事を目的としたワーキンググループ等を設置し、臨床研究推進センターと研究推進課が連携して実務面及び財政面でのサポートを行うとともに、臨床研究に係る各種契約業務、研究資金の受入れ及び管理業務などの事務手続きのサポートを行っている。

※バイオバンクを有している場合は以下に記入してください。

名称	設置時期	試料種別	保存試料数	疾患名
東大病院バイオリソースセンター	R3年4月	組織（腫瘍・正常）、血液（DNA、血漿）	約550検体	がん

1. 事業の構想

(1) 国際レベルの臨床研究の推進、(2) 予算の活用計画

<国際レベルの臨床研究推進の方策>

本事業では、がん分野における臨床研究を推進するための人材養成と研究支援体制強化を同時に行い、両者を連動して進めることでより効率的・効果的な事業推進を目指す。本学ではがん分野における様々な臨床研究を国際レベルで実施しているが、ヒト検体へのアクセスの難しさは基礎研究室をはじめ研究推進の障壁となり、諸外国に後れを取る要因の一つとして重要な課題である。東大病院バイオリソースセンターは2021年度に設置され、バンキング検体を用いて、全ゲノム解析等実行計画（AMED等）、各診療科における研究に利用しているが、人員・予算が限られるため最低限の機能維持にとどまり、バイオバンクとしての機能・規模を十分に拡充できていない点が課題である（これまでの実績：550件/3年間）。本事業でバイオリソースセンターの体制を強化することで、バンキング対象患者を大幅に拡大し（目標：年間300件以上）、電子化された病理スライドやホルマリン固定パラフィン包埋検体等の利用と合わせ、広く学内外の研究者にヒト試料を提供することが可能となる。さらに、バイオリソースセンターで取得する検体の研究利用に関する包括的な同意も、現在はがん手術患者の一部にのみ行われているが、本事業では内視鏡やCTガイド下生検など、最終的に病理診断対象となるがん患者のすべてから同意を取得する体制整備を目指す。また、病理診断の確定に必要な分子レベルの検査（融合遺伝子や遺伝子増幅・欠失等）のニーズが増えているが保険診療では実施困難なものが多く、これらの分子病理解析に対応し診療・研究を支援する体制を構築することで、高度がん医療の実践や臨床研究を可能とする。こうした体制強化の下で、がん診療・研究におけるアンメットニーズを解消しつつ、同時に橋渡し研究やアカデミア創薬における人材養成プログラムを実施することによって、効果的に国際レベルの臨床研究推進を実現する。

<推進体制及び予算の活用計画>

人材養成活動と支援体制強化に専任で取り組む教員や技術職員を雇用し、関連診療科・部門との強固な連携体制の下、さらに外部講師の招聘により事業を推進する。

現在はバイオリソースセンター雇用は技術職員1名のみで、専任の教員配置はなく、機能を拡大し、全体を統括するためには専任の特任教員の雇用が不可欠であり、この教員は本事業における人材養成に関しても中心的に調整や教育に取り組むことで、機能強化と人材養成を円滑に連動させて推進する。バイオリソースセンターの機能拡大・強化のため、検体採取や検体処理（凍結、DNA抽出、管理、データベース作成等）を担う人材を1名、デジタル病理画像管理や標本作成等の業務を担当する人材を1名雇用する。バイオリソースセンターの機能強化のための機器購入に加え、病理部門と連携の下に保険適応でないが高度がん医療の実践に必要な検査の実施（脳腫瘍における1p/19qコピー数異常やメチル化解析、子宮体癌におけるPOLE変異解析、NTRK融合遺伝子や保険適応外のHER2検査などを想定）をはじめ診療・研究を支援する分子病理解析を実施する体制を構築するために設備の整備と特任教員の配置を予定している。

バイオリソースセンターにおける検体採取や処理については、病理や外科領域の大学院生がRAとして参加し、人材養成と同時に病理や外科領域の医師の負担軽減を図る。医学生教育では、がん遺伝子パネル検査における結果の解釈やエキスパートでの発表指導に関して当該診療科の大学院生がTAとして指導を担当する。このように働き方改革にも配慮した人材養成を効率的に実施する。

(3) 人材養成

がん遺伝子パネル検査に代表されるがんゲノム医療が急速に普及し一般化しつつある一方、対応できる医師の不足が顕在化している。現時点で医学生に対するがんゲノム教育は限定的であるが、本事業では本学の特徴を生かしたがんゲノム医療教育・実習を重点的に行う先駆的取り組みを実施し、リサーチマインドの涵養を重視した指導を行う。特に興味をもつ学生に対しては将来この診療・研究分野をリードする人材を育成すべく短期集中型の実習コースも用意し、がん遺伝子パネル検査の全過程を経験する実習を通して極めて高い効果が期待できる。大学院生教育においては、がんプロフェッショナル養成事業を3期まで実施し高い評価を得た経験をもとにしつつ、この枠組みを大幅に改変、発展させる形で新規のプログラムを実施する。「高度がん医療人材養成コース」による充実した大学院講義に加え、大学院生のエキスパートパネル参加やTAとしての教育、解説担当機会を提供する。今年度より東大病院に設置された臨床腫瘍科の教員を中心に「TR（トランスレーショナルリサーチ・橋渡し研究）・アカデミア創薬人材育成プログラム」を新設する。これは高い実績のあるJ-HOPEプログラム講師によるセミナーやSPARKプログラムのエッセンスを反映させ独自に考案した人材育成プログラムで、内外のエキスパートによるセミナーをベースとし、TR・アカデミア創薬で活躍する腫瘍内科医をはじめ高度がん医療を担う医師養成を目指す新たな取り組みである。こうした人材育成プログラムと連動して、バイオリソースセンター機能強化をはじめ本事業の支援体制面での取り組みを進めることで、大学院生や医師が橋渡し研究やアカデミア創薬をより高いレベルで効率的に進めることができ、研究力強化と人材養成をさらに後押しする効果が期待される。また、光学医療診療部との連携により、東京大学で開発された胃カメラに代表される内視鏡医療にも精通した内視鏡医師・研究医（メディカルスタッフを含む）を育成するプログラムを本事業で構築することも検討している。加えて、EUS-FNA検体や気管支鏡検体を含め、生検検体を用いたゲノム解析の臨床研究・開発、人材育成にも取り組む。さらに遺伝性腫瘍の専門家を育成するプログラムも用意する。

(4) 達成目標・アウトプット・アウトカム（評価指標）

（達成目標）医学生、大学院生教育においては人材不足が顕在化しているがんゲノム医療分野を中心に先駆的な臨床実習プログラム等に取り組み、高度がん医療を担う人材を育成する。臨床研究推進上の障壁となっているヒト検体へのアクセスや患者同意取得について、関連する診療科との連携の下にバイオリソースセンターの体制強化を実施し、がん分野における臨床研究を円滑かつ効率的に進める体制整備を行う。

（アウトプットと評価指標）（必須指標：◆、任意指標：◇）

- ◆診療参加型臨床実習の充実：医学部生教育活動に参加するTAの人数（年間5名以上、R7年度までに達成）
- ◆研究環境の充実：バイオリソースセンターバンキングに参加するRA（年間5名以上、R7年度までに達成）
- ◆臨床研究支援体制の充実：臨床研究支援者の増加（本事業で雇用する教員および技術職員が年間計3名以上を目標、R7年以降達成）
- ◇がん医療関連セミナー開催数（年間15回以上を目標、R7年度までに達成）

（アウトカムと評価指標）（必須指標：◆、任意指標：◇）

- ◆門田レポートで医学生が実施すべきとされている医行為の経験率の上昇（目標を様式1_別添に記載）
- ◆臨床研究論文数の維持・増加（R5年度実績比での維持・増加を目標）
- ◆研究支援者を配置する研究室・診療科等の医師の教育研究時間の維持・増加（R5年度実績比での維持・増加を目標）
- ◆医学系大学院生の維持・増加（R6年度入学実績比での維持・増加を目標）
- ◇エキスパートパネルで医学生が解説を担当した件数（R8年度までに年間15件を目標）
- ◇バイオリソースセンターにおけるバンキング件数（目標年間300件、R8年度までに達成）
- ◇残余病理検体の研究利用に関する包括同意取得件数（目標年間500件、R8年度までに達成）

(5) 診療参加型臨床実習の充実に関すること

①課題・対応策 高度がん診療に対応できる人材不足が深刻化している。<u>医学生からがんゲノム医療に対応できる素養を身につけ、特に興味のある学生に対してはより高度な参加型実習を行う。</u>各分野のトップレベルの教員を要する本学の基盤を最大限に活用し、本事業ではがんゲノム医療関連臨床実習の充実のため以下の取り組みを実施する。指導に当たっては大学院生もTAとして参加する。 ・<u>クリニカルクラークシップ(5, 6年次に実施)で全員必修の実習:がんゲノム医療を概観する実習を設定し、がんゲノム医療に対応できる素養を身につける。</u>クルズス、見学、実際の症例を用いた演習からなる半日の実習。体制強化されたバイオリソースセンターではがんゲノム時代に不可欠な病理検体取扱いの知識を教育し、院内NGSラボと連携して一般的ながんゲノム解析技術や知識の修得を目的とした実習を行う。 ・<u>クリニカルクラークシップで選択式の実習:</u>必修の実習内容に加え、<u>意欲の高い学生に対するアドバンスコースとして「がんゲノムコース」を設定する。</u>臨床経過・病理所見と合わせがん遺伝子パネル検査結果を解釈し、エキスパートパネルでの発表までを経験する。その週に検討症例のある診療科(臨床腫瘍科、消化器内科、呼吸器内科、小児科、腫瘍外科など)または病理部をローテーション時に選択可能である。 ・<u>「がんゲノム医療短期集中型実習」(エレクトィブクラークシップ):がんゲノム医療に興味のある学生が選択して1か月間取り組む実習をゲノム診療部で実施する。</u>他診療科を選択したエレクトィブクラークシップ学生も希望に応じて一部の内容でも参加可能とし、診療科横断的にゲノム学を学ぶことができる。がん遺伝子パネル検査をはじめ、がん医療に関連した分子病理学的解析、全ゲノムシーケンス(WGS)や全エクソンシーケンス(WES)についても実際の手法やデータ解析法の指導を行う(バイオリソースセンター内に本事業で構築する分子病理解析体制、院内NGSラボや医科学研究所との連携)。<u>がん遺伝子パネル検査実習では、各診療科との連携のもとに医学生が症例を担当し、臨床経過を診療録からまとめ、臨床上の問題点や治療方針を指導医とともに検討する。病理所見についても、病理医から指導を受ける。検査レポートの解釈、院内事前検討会での解説を行い、エキスパートパネルでの議論を経験する。特に検査レポートの医学的な解釈に重点を置き、データベースや論文検索をもとに、遺伝子変異や変異頻度・MSI等について、臨床的意義、候補薬剤の妥当性評価、二次的所見の開示必要性について検討することを学習する。二次的所見については遺伝カウンセリングに陪席する機会を提供する。</u>こうした取り組みは 標準治療後のがん患者・家族とのコミュニケーション教育にもつながる。
②達成目標・評価指標 (達成目標) 人材不足が顕在化するがんゲノム医療に対応できる素養を全医学生が身につけ、特に興味ある学生には高度な実習機会を提供することで、将来的に我が国の高度がん医療を担う人材を養成する。 (アウトプットと評価指標) (必須指標: ◆、任意指標: ◇) ◆診療参加型臨床実習の充実 本事業で雇用され指導を担当する教員数教育支援者(目標1名以上、R7年までに達成) 教育的配慮の下教員の教育活動に参加するTA数(目標年間5名、R7年度までに達成) (アウトカムと評価指標) (必須指標: ◆、任意指標: ◇) ◆門田レポートで医学生が実施すべきとされている医行為の経験率の上昇(目標を様式1_別添に記載) ◇クリニカルクラークシップで「がんゲノムコース」を選択した学生数(1学年で10名以上、R7までに達成) ◇エレクトィブクラークシップで「がんゲノム医療短期集中型実習」を選択した学生数(年間3名以上、事業補助期間中で計15名以上を目標) ◇エキスパートパネルでゲノムレポート解説を経験した医学生数(年間10名以上、R7年までに達成)

2. 拠点大学としての役割・事業成果の普及

(1) 臨床研究について、他の大学や研究者、企業等の事業機関をけん引する方法

バイオリソースセンターの機能拡大、がん遺伝子パネル検査プラットフォーム開発に関する臨床研究やその枠組みを利用した教育に取り組み、学外研究者や企業（株式会社テンクー：AIを用いたゲノムレポート作成システムの開発やコニカミノルタ株式会社：がん遺伝子パネル検査の多機能化の促進、病理AIの活用等）との共同研究を活性化し、高度がん医療分野における臨床研究をけん引する。「TR・アカデミア創薬人材育成プログラム」等で実施する年間15回以上のセミナーは他大学にも配信し、アーカイブ化して広く人材育成に活用する。

(2) 医療情報等の研究データ等を共有する取組

本事業により体制強化したバイオリソースセンターでバンキングされた試料やデータ（病理画像のWSI等を含む）に関しては、アカデミアのみならず、企業等での利用も含めて患者同意を取得しており、利用可能である。全ゲノム解析をはじめとしたマルチオミクス解析と臨床情報、病理画像とを連結させることで、試料・情報の価値を高め、学内外利用案内のためのバイオリソースセンターホームページを新規に作成し、がん研究領域の他大学や研究者、企業等の事業機関への利活用推進を行う。

(3) 事業成果の普及

本事業の専用ホームページで常時本事業の取組を公開して、先駆的かつ具体的な教育・研究内容を全国に広報する。さらに、がん医療関連セミナー（年間15回以上開催）、市民公開講座（年間1回予定）等でも本事業成果を発表するなど、一般国民も対象として広く積極的な情報発信に努める。本事業での機能強化の一環としてバイオリソースセンター案内ホームページを作成し、利活用普及・推進に取り組む。

3. 医師の働き方改革への取組

がん研究における検体の利活用体制や患者同意取得体制を整備することで、中長期的にはプロジェクトごとに患者同意を取得したり、研究倫理申請関連の作業に多大な労力を使う時間が大幅に削減される。さらに、**TAやRAの参加を本事業で支援**することで、エキスパートパネルの実施や準備、医学部生教育、バイオリソースセンターのバンキング事業などにおける**医師の負担を軽減することが可能**となり、教育・研究時間の確保につながる。特にエキスパートパネルは人材不足に加え担当医師の大きな負担となっているため簡略化が叫ばれているが、本学ではエキスパートパネルの高い質を維持することを重視し、丁寧な症例検討・解説を行い、議論の時間を確保していることが特長であり、エキスパートパネルを教育の場としても位置付けている。結果として**多数の医師の養成により働き方改革につながり、さらにがんゲノム医療の深い理解を通して臨床研究の推進につながる**と考えている。さらに本事業によりTA制度を活用することで大学院生や医学生のエキスパートパネルへの積極的な参加を促し、教育・人材育成と同時に医師の働き方改革の一助となる。同様に、バイオリソースセンターでのバンキングも病理や外科領域の大学院生がRAとして積極的に参加することで適切な検体採取や取扱いの重要性を身につけつつ、医師の業務負担軽減に大きく資することが期待される。

4. 事業の運営体制

東京大学大学院医学系研究科長を委員長として、関連する診療科や部門、研究室から選出された委員で構成される運営委員会が事業運営を行う。医学生教育では臨床実習・教育支援室やエキスパートパネルを運営するゲノム診療部、TR・アカデミア創薬人材育成プログラムを主に担当する臨床腫瘍内科、バイオリソースセンターや病理部等関連部門と密な連携体制の下に最大限のアウトカムを目指した運営に努める。事業の評価については、外部委員から構成される外部評価委員会を毎年開催して評価を受ける。設定されたアウトプット・アウトカムの指標をはじめ、年度ごとの事業報告をもとに評価される。外部評価委員会には運営委員会委員も参加して、毎年の評価結果についての対応状況を説明し、評価結果が事業計画の見直しに反映されているかについて、外部評価委員会が判断する。

5. 事業の継続に関する計画

本事業で立ち上げる医学部生、大学院生教育プログラムは補助事業終了後も継続可能である。予算面に関しては、本事業でバイオリソースセンターの機能強化を事業前半に行い、同時に利活用推進に取り組むことで、長期的には内外の利用者からの利用料金による収入の大幅増が見込まれる。また、診療・研究における分子病理解析支援機能を事業前半で構築し、利活用を広めることで事業後半から試薬等を利用者負担として運営することで経費を抑え、さらに利用対象を事業協力病院を含めた学外にも拡げ収入源とする構想がある。これらにより**補助事業期間終了後も自律的な運営を維持・発展させ、技術職員の雇用、教員の配置を維持できるように努め、TA、RA参加も含めた持続可能な高度がん医療に対応する人材養成を継続**する。現時点では本事業成果によるこれらの自己財源の正確な予想は困難なため、教員の雇用についてはR7～R10年度に特任准教授1名・特任助教1名、最後のR11年度は統括する特任准教授1名のみとしたが、これに加え、上述の本事業収入に応じて特任助教1名あるいはそれ以上の配置など、事業規模拡大に応じた人員配置を行い事業を継続する。

6. 年度別の計画

令和6年度	① 7月－3月 バイオリソースセンター機能強化のための設備強化・同意取得増加体制構築 ② 10月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 12月－3月 次年度からの高度がん医療人材育成コース準備 ④ 10月－3月 分子病理解析支援体制構築のための調査・準備 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1月－3月 外部評価委員会による外部評価の実施
令和7年度	① 4月－3月 バイオリソースセンター機能強化・同意取得増加に取り組む・分子病理解析等の研究者支援も開始する。 ② 4月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 4月－3月 大学院「高度がん医療人材育成コース」での人材育成の実施 ④ 4月 エクティブ・クラークシップ「がんゲノム医療短期集中型実習」の実施 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1－3月 外部評価委員会による外部評価の実施
令和8年度	① 4月－3月 バイオリソースセンターでのバンキング・研究者支援 ② 4月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 4月－3月 大学院「高度がん医療人材育成コース」での人材育成の実施 ④ 4月 エクティブ・クラークシップ「がんゲノム医療短期集中型実習」の実施 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1－3月 外部評価委員会による外部評価の実施
令和9年度	① 4月－3月 バイオリソースセンターでのバンキング・研究者支援 ② 4月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 4月－3月 大学院「高度がん医療人材育成コース」での人材育成の実施 ④ 4月 エクティブ・クラークシップ「がんゲノム医療短期集中型実習」の実施 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1－3月 外部評価委員会による外部評価の実施
令和10年度	① 4月－3月 バイオリソースセンターでのバンキング・研究者支援 ② 4月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 4月－3月 大学院「高度がん医療人材育成コース」での人材育成の実施 ④ 4月 エクティブ・クラークシップ「がんゲノム医療短期集中型実習」の実施 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1－3月 外部評価委員会による外部評価の実施
令和11年度	① 4月－3月 バイオリソースセンターでのバンキング・研究者支援 ② 4月－3月 TR・アカデミア創薬人材育成プログラムでの人材育成の実施 ③ 4月－3月 大学院「高度がん医療人材育成コース」での人材育成の実施 ④ 4月 エクティブ・クラークシップ「がんゲノム医療短期集中型実習」の実施 ⑤ 10月－3月 クリニカルクラークシップでのがんゲノム医療実習（必修及び選択）の実施 ⑥ 7月－3月 セミナー・市民公開講座の開催 ⑦ 1－3月 外部評価委員会による外部評価の実施